魚と水　Uo to Mizu (47-2)：12-13, 2010

ある無名キャラクターの引退

内藤　一明

無名キャラクターの誕生

平成22年4月1日、北海道立総合研究機構の設立に伴い、北海道立水産孵化場はその歴史を終えました。それと同時に、ある無名のキャラクターが引退しました。それはこのサクラマス稚魚です（図１）。

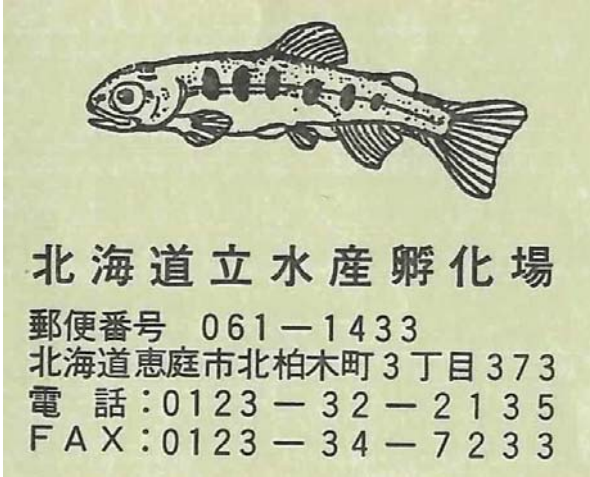

図１　北海道立水産孵化場の封筒とキャラクターのサクラマス稚魚

ご存じのようにこれは水産孵化場孵化場の封筒のキャラクターとして長らく使われてきました。今を遡る平成６年、当時の水産孵化場で従来の茶封筒にかわって新しくキャラクターがついた封筒を作ることとなり、その原図が筆者に依頼されました。当時の担当だった企画室の松尾圭子主査（現北海道水産林務部）によれば、封筒の色まで気をつかってデザインしたとのことです。さて、サクラマス稚魚と書きましたが、この図のモデルは当時の熊石町にあった熊石支場で養成していたサクラマスの浮上稚魚（熊石尻別系F1：尻別川に溯上した親魚から採卵して池中で養成した群の子）です。なお、現在同支場は八雲町の道南支場となり、町名も支場名も変わってしまいました。まさしく光陰矢のごとしであります。このころはＰＣＲによる早期性判別はまだ確立されておらず、モデルの性別は不明です。学術的なスケッチではありませんので多少のデフォルメがあり、決して鰭条数が違うなどと言わないでください。但し、サクラマス稚魚の特徴は出るように、パーマーク等の基本的な形態には気を使って書いてあります。ところが、封筒用に縮小したところ、細部がつぶれて

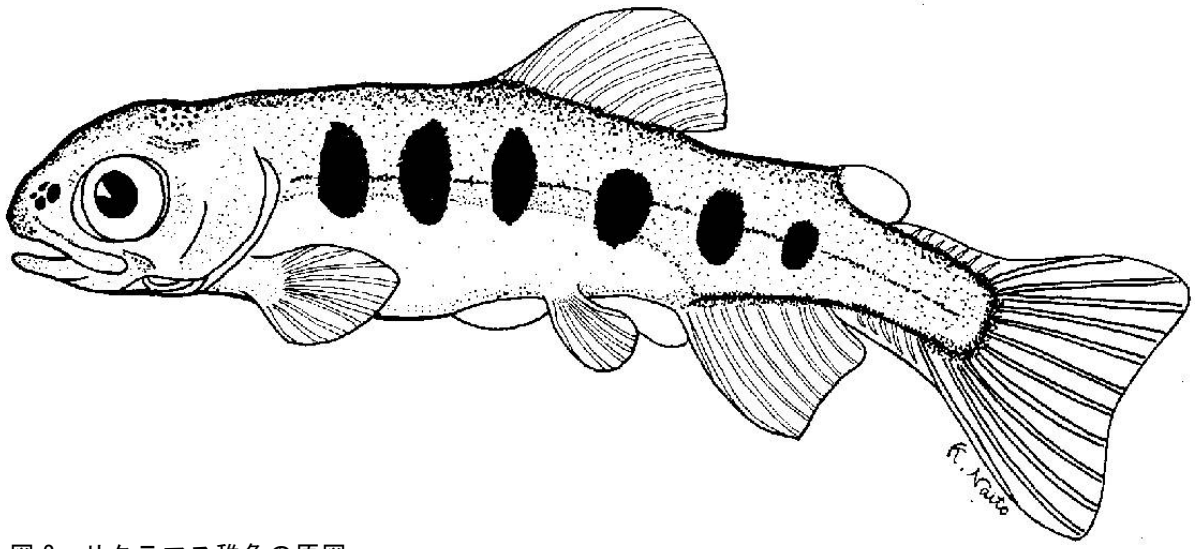

図２　サクラマス稚魚の原図

よく見えなくなってしまいました。そこで、図 2 に原図をスキャナーで取り込んだものを示してあります。

当初封筒のデザインは数年後にまた見直すという話でした。しかし、その後一向に新しい封筒を作る気配はなく、爾来足かけ 17 年このサクラマス稚魚は水産孵化場のメッセンジャーとして使用されてきました。その役目は十分果たしたと思います。

以外な結末

ところが、本来引退するはずだったかのサクラマス君ですが、大量に在庫している各種サイズの封筒を廃棄するのはもったいないという話になり、道総研さけます内水試のシールを貼って再利用することとなりました(図３)。あ、そうか、サクラマスも再任用されたんだ。そうするともうあと 5 年はいるのかな？

図 3　再任用された？封筒とサクラマス稚魚

（内水面資源部　ないとうかずあき）